

県立高等学校教育課題研究指定校事業～未来を担う人材の育成を目指して～
「公民科による主権者教育の取組」
「知立市の未来を考えるシンポジウム～住みよいまちから住みたいまちへ～」

11月22日（水）に本校で「知立市まち・ひと・しごと創生若手職員プロジェクト」の方々をお招きして、本校生徒と知立市役所職員による「知立の未来を考えるシンポジウム～住みよいまちから住みたいまちへ～」と題したシンポジウムを行いました。これは総合的な学習の時間の「主権者教育」における「地域課題を考える」の一環で、その中で公民科の授業で身につけた知識や技能を活用し、知立市に対して政策提言を行うという取組です。

このシンポジウムを開くまでに、2年生「政治・経済」および3年生「現代社会（理型選択者）」「倫理（文型全員および理型選択者）」の授業で地域社会の問題を学習しました。そして、「総合的な学習の時間」において11月15日（水）にグループで提言をまとめ、11月17日（金）にクラス全員の前でグループごとに発表を行い相互評価をしました。その中から2年生と3年生から1グループを選出し、シンポジウムの参加者となりました。選ばれた生徒たちは、短期間の内に発表原稿をつくり、資料を集めるなど、知立市への政策提言をまとめました。

当日は全校生徒が体育館に集まり、壇上では発表生徒の他、知立市役所の若手職員の方4名がパネリストをつとめ、会のコーディネーターを岐阜大学教育学部准教授の田中伸先生にお願いしました。

最初に2年生が「大あんまき祭り～知立（ちりゅう）と知立（しりゅう）～」と題して提言を行いました。知立市の現状と課題として「地域の人々の交流が少ない」「ブラジル人との接点が乏しい」「若者が立ち寄るようなおしゃれな場所がない」「知立の文化がうまく生かされていない」を挙げ、知立市へ「大あんまきクッキング」や「大あんまきフェス」などを提案しました。

次に3年生が「笑子交齢化（しょうしこうれいか）」と題し提言を行いました。知立市の現状と課題として少子高齢化の進行で地域の子供会の会員数減少や会の消滅などにより子ども同士の交流の場所が減っていることを問題としました。そこで、普段使っていない公民館を開放し世代間交流の拠点とすることを提案しました。高齢者の方の趣味を活かした教室や、小学生だけではなく中学生や高校生なども遊んだり学んだりする場所として活かすことはできないかという提案でした。

生徒の提言に対して、コーディネーターの田中先生の進行により知立市職員の方々と対話を行いました。職員の方々からは生徒の提案への疑問点や問題点を指摘していただき、それに対する生徒が反論や意見を述べるという形で会は進行しました。現実社会で活躍している大人の意見にひるむことなく、グループで相談しながらどうすれば自分たちの考えを理解していただけるか一生懸命考え主張していました。田中先生もコーディネーターとして一見荒唐無稽に思われる提案や意見であっても、そこから高校生の考えをくみ取り、知立市職員の方々と議論が深まるように会を進めていただきました。

シンポジウムは発表も含めると約40分間でした。時間の制約もあり、議論を打ち切らざるを得ず、大変残念でした。発表した生徒からは終了後「まだ言い足りない。もっと、

主張したいことがあった」という声や、会場で聴衆として参加した生徒の中から「自分にも意見を言わせて欲しかった」と言う声も上がりました。

今回生徒たちはこのシンポジウムに対して真剣に取り組んでくれ、われわれ教員が想像していたよりも課題解決に向かう力を感じました。また今回のシンポジウムに聴衆として参加した生徒は、高校生と大人との対話が成立している姿をみて、論理的に筋道をたて、根拠にもとづいて他者と討論することで、自らの思いを表現することができることを学ぶことができたと思います。しかし、シンポジウムの時間の長さ、取り上げる題材、準備のための時間、個人・グループ・クラス内・全校と段階に応じてどのように考えを深めさせるか、まだまだ課題は山積しています。今回の取組で出た問題点を整理し、主権者としての高校生を「地域社会の担い手」とするためにはどのような授業をすべきか研究していきたいと思います。

最後になりましたが。このシンポジウムを開催するにあたって協力していただきました知立市企画部企画政策課および会長の清水様をはじめとした「知立市まち・ひと・しごと創生若手職員プロジェクト」の方々、そして岐阜大学の田中伸先生には大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

(生徒の発表の様子)



(討論の様子)

